

巻頭言：〈人為〉の人間学

金 森 修

いつ頃からか、ルソー的な「自然に帰れ」思想を、一種の対抗思想としてみるという姿勢が身についていた。作り物で紛^{まが}い物の文明装置を、デフォルトとして想定される〈自然〉という準拠点との距離感の中で評価するという考え方、言い換えるなら、自然 vs 人為の二項対立の中で後者を貶^{へんげ}下するという考え方——そういう発想を採らないということだ。人智などは、精妙な自然の論理に比べれば、しょせんは儻^{はかな}い〈不自然〉にすぎず、不自然の不自然さのままに、いずれは無様に崩れ果て、塵芥^{ちりくた}に戻るという考え方——それが全く無意味な発想だとは思わないが、可能な限り、それに逆らうという姿勢をとるのだ。

この、〈自然に対する不自然なまでの反抗心〉が、なぜ私の意識に巣くう基本方向になったのだろうか。それには、やはり私の人間観が利いている。人間は生命の自然的過程の中で進化してきたという事実にも拘わらず、〈人間の人間性〉を錬磨して、人間の文化や文明を創っていく過程で、恐らくは不可逆的に自然から乖離・離脱してしまったのだ。「文明が進めば進むほど人間の純朴さが壊れ、人間は腐敗していく」という類の糾弾は、隔世遺伝的に突如出現した〈高貴なる野蛮人〉の御託宣ではなく、同時代人に対し、そのような仮想的〈原始自然〉を立ち上げてみせることで一定の政治的効果を狙った、極めて技巧的な〈文化人〉の戦略に他ならない。〈手つかずの自然〉などというものは、もはやどこにも存在せず、それを想像することさえ絶望的なまでに難しい。確かに、われわれ人間は〈土塊^{つちくれ}〉から造られはしたのだろうが、その〈土塊〉は、あまりに自己の〈起源〉を否定する性癖が身につきすぎ、土なのか、火なのか、空気なのか、水なのか、もはや自らの〈元素〉さえ、見分けがたいものになっている。

あまりに〈不自然な乖離過程〉を邁進し続けてきたせいで、人間は、生物進化の過程で受け継いできたはずの多くの〈生物学的基盤〉をも、或る程度無視する装置を身につけた。確かに〈或る程度〉であって、完璧に、とはいえない。水を欲する身体は、或

る段階からその渇きの苦痛を野放図に自己主張するだろうし、それでも水を与えられない場合、身体は遂に力尽きるだろうから。だが、ここで私が〈装置〉と呼ぶものは、渇水や飢餓などは、あたかも二次的だともいえるかのような顔をさせる、その〈顔貌〉調整機構のことだ。〈生物的過程〉などはあたかもどこかに忘れてきたかのような顔をしながら、われわれは社会生活を営む。もちろん、人前で飲食をしたり、生物的必要性に駆られて〈廁^{かわや}〉に駆け込んだりもする。だが、それは、〈顔貌〉調整機構の裂け目であり、その本筋ではないという事実、なんら変わりはない。

そして、自らの生物的基盤への一種の〈侮蔑〉は、今日のように生物学・医学の急速な発展によって、人間が〈人体の自己理解〉を加速度的に精緻化している時代においてさえ、本質的には変わらないと見なすことができる。われわれは、生物的自己理解を周辺化し、忘却したがる生物である。なぜなら、われわれは、人体ではなく人間だからだ。

だから〈人間の人間性〉なるものの、普遍的かつ確実な準拠点は存在しない。人間にとって、人体は活動の起動点を保証する機能的材料にすぎない。そしてもちろん、人間は起動因によって押されながらではなく、目的因によって引かれながら人間的生を生きている。〈人間の人間性〉は、可視の人体を微妙に離れ、不可視の人体周辺をその活動舞台とする。人間性の描出は、何ら客観的記述などではなく、実は、見なしと見切り、編集と装幀の相関者である。人間は、お互い同士、他の人間がどの程度まで〈人間的〉かを評定し、査定する。人間は人間である、というよりは、人間として見なされる。そしてその〈評価軸〉と自然的生との交差のために、〈人間性のスペクトル〉には、非人間・亜人間・超人間が絶えず混ざり込むということになる。人間性の総体的対象化を試みようとする者は、〈対象化〉の力学には最も相応しいように思えた自然科学的眼差しをやがては超脱して、憧憬と忌避、称賛と軽蔑の嵐の中で、

人間性には静謐な輪郭など指定できないという事実
に逢着する。

子どもから成人へ、〈人体の自然的発展〉がもつ顕
在性と自同性の傍らで、われわれ人間は、〈人体の自
然〉が〈人間の非自然〉とどのように交差し、拮抗
し、補完しあっているのかを見極めねばならない。

そして最終的には、〈人体の自然〉ではなく、〈人間
の非自然〉の方にこそ、統制的な審級が潜んでいる
という事実を意識化しなければならない。人間の輪
郭には、〈進化の自然〉ではなく、〈人為の不自然〉
の刻印が刻まれているのである。

(二〇一〇年五月八日)